

宝の海から

白浜で出会った生きたサケガシラ

25

京都大学助教授 久保田 信(京都大学 瀬戸臨海実験所)

珍客たちの漂着

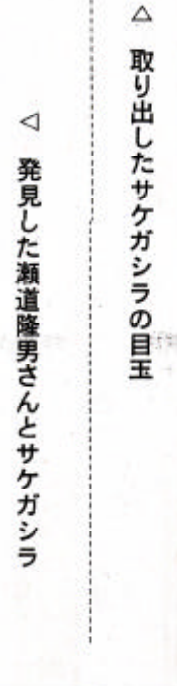
初めて見た人なら「何だこの魚は」と驚いて、所の院生たちと解剖し、まづ、それほど変わった詳しく調べた。胃の中が容姿をしたサケガシラが小魚2個体が出てきた(フリンデウオ科)が、消化されていて、その種類は分からなかった。2004年1月12日に白浜町の鴨居漁港に生きたまま打ち上げられた。優は、びっくりと寄生虫が、体長2.5cmを超える大形個体で、弱ってはいくも、の海に戻してやる、游泳した。

水っぽくまずいサケガシラ

目までに記録されたサケガシラは計6個体。いずれも、体長2.5cmを超える。Sが取材にやって来た。大形個体である。どの個体も傷がないことから、『特ダネ』情報のニュースとして、1月15日の朝夕に2回紹介された。院知人から次々と反応があった。生たちと共に番組でインタビューなどを受けながら、白浜の鴨居漁港では翌

ら出演した。このニュースは全国に流れ、各地のお祭りの準備で忙しうており、きつと宝の海からの贈り物だったのだらう。

昔から「深海魚のサケガシラなどが打ち上がる」と大地震が起こるといふ言い伝えがある。テレビでは漂着と地震予知との関連が問われていた。これは地元の人々も同じで、これら7個体について思い、これまで一度も瀬戸臨海実験所の田名瀬英明さんと一緒にまづ、南紀生物同好会の会誌「南紀生物第46巻」号に掲載する予定だ。なお、サケガシラの液浸標本は、県内では海老市の県立自然博物館と串本町の海中公園センターで展示されており、興味のある方はぜひ見ていただきたい。リュウクワノツカイは大坂市立自然史博物館で見ることが出来る。このほか、冬季に打ち上がったものとしては、サケガシラの親類で珍客のフリンデウオがある。ただ、1個体だけだが、体長数センチほどの小さな若幼魚だった。2001年3月19日にホヤなどの仲間である動物プランクトン「オオサルバ」などとともに発見された。このころに外洋水塊が北浜付近の海岸へ接近しており、何らかの関連が考えられる。



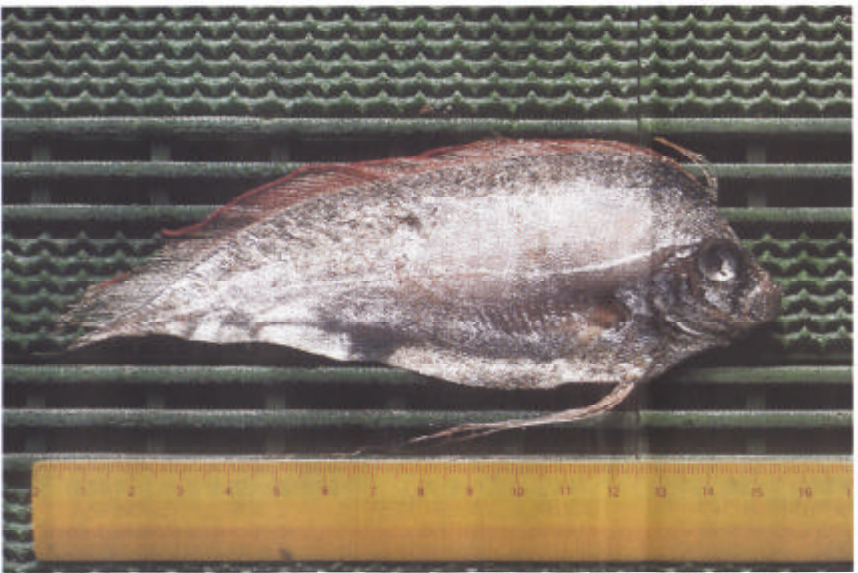
△ 取り出したサケガシラの目玉

▽ 発見した瀬道隆男さんとサケガシラ



鴨居漁港に漂着したサケガシラ。寝ころんでみるとその大きさが分かる

北浜へ打ちあがった珍しいフリンデウオ(幼魚)



白浜町周辺の沿岸で過去約20年間に記録されたサケガシラ				
年	月 日	場 所	体長(㎝)	状 態
1987	5月21日	塔島	255	漂着・死亡
1994	6月4日	瀬戸漁港	約200	漂着・死亡
1996	10月16日	白良浜	約250	漂着
1997	6月7日	湯崎海岸	約200	水深2.5mを遊泳
"	12月6日	芳養沖約2*0	276	漁網捕獲
2004	1月12日	鴨居海岸	230	漂着
"	1月20日	鉛山湾	約200	水深1.5mを遊泳

「これまでこの原稿を書いた段階で、瀬戸臨海実験所近くにあるタイピンショップ「Miss Ocean」から、「1月20日に生きたサケガシラをスタッフの岡野泰三さんが見つけた」という連絡が入った。円月島がある鉛山湾のほぼ中央部での遭遇。その日に撮影したという写真を見せてもらい、状況を聞いたところ、この個体は片方の目が傷ついており、水面直下を斜めに遊泳しているところである。連絡のリュウクワノツカイと同じ

地元で遊漁船業を営む瀬道隆男さんの知らせで、すぐ現場に駆けつけた。貴重な標本となるので、体の計測や体部位の撮影とともに漂着状況を聞き取り調査した。また、その場で解剖し、内臓と頭部を研究用に持ち帰った。目玉はとくに大きな子でもの「ぶいんぶいん」であった。光りの届かない深海でも見えるように、大目でも見えないように、大きくならないに違いない。

研究に必要な部分を取った後、余った中毒性のない肉片をいろいろな料理法で試してみた。なんと水っぽい。他にたろろとえもい味であった。決しておいしいものではなかった。次に漂着した場所は、どこかで標本として保管できる体制をとりたい。

今回の個体は現在、新瀧大学の岡野先生が生殖巣の組織を薄く切り、細胞などを精査している。生殖巣が退化した雄個体であることなど、いろいろなお話がある。この珍しい漂着は1月14日付の紀伊民報で報じられた。同社のホームページ

フリンデウオやその仲間、北浜道から沖繩県にかけて捕獲されているが、普段は沖合の数センチほどの深みで遊泳して暮らしているため、生活史は分からない。今後の研究が待たれる。